

『 無関心に対する教会 』

使徒の働き 23 章 25-35 節

青木 信太郎

◆ はじめに

今朝は礼拝式の中で聖餐式を執り行います。イエス様が十字架で処刑されたその傍らで、大勢の人々がその場に居合わせました。そのほとんどの人々がイエス様に反する人々ばかりでした。処刑を執行したローマ兵たち、イエス様を憎んでいた祭司長、律法学者たち、イエス様と一緒に処刑された二人の強盗、そしてユダヤ人民衆も近くから遠くから、その光景を見ていたことでしょう。イエス様が十字架上で【父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか、自分で分からないのです】と祈るその傍らで、メシヤ=救い主であると気づいて心動かされたのはごく僅か、隣で処刑された強盗の一人、そしてローマ兵の百人隊長だけでした。

いつの時代においても、イエス様の十字架の意味に対して無関心な人々が多数であると言えるかも知れません。私たちは“無関心”という圧倒的多数の中でイエス・キリストの十字架と復活における救い=福音の素晴らしさを信じて伝えて行くのです。

◆ 千人隊長の関心

前回は、暗殺計画を目論む 40 人ほどの熱心党员たちからパウロを守るため、千人隊長は約 500 人の兵士によってパウロの護衛を命じました。パウロのエルサレム脱出からローマへの道を主は備え、守り、確かに導かれておられます。

今朝のテキストは、パウロ移送のために千人隊長から総督ペリクスに宛てた手紙の内容です。まずは前半から見てまいります。【25-27 節】ここで初めてローマ軍千人隊長の名前が分かります。彼の名は「クラウデオ・ルシヤ」。ルシヤという名前からギリシヤ語圏出身であることが分かります。そしてローマ市民権をやっとのことで得た時、当時の皇帝クラウデオの名前を拝借したと思われれます。そして、千人隊長クラウデオ・ルシヤは早速、どのようにしてパウロを保護するようになったのかという状況を 27 節で説明しています。これは、エルサレム警備にあっていたローマ軍側から今回の問題がどの様に映っていたのかを事実に基づいて示している内容と言えます。但し！！！！ここには千人隊長ルシヤの保身が明確にされています。彼は自分に都合の良いように一つの事実を歪曲しています。パウロが【ローマ市民であることを知りましたので、私は兵隊を率いて行って、彼を助け出しました】パウロがローマ市民権を有していることを千人隊長が知ったのは、パウロを助け出した後です。なぜ、この部分だけ順序を変えて事実を歪曲しているのでしょうか？それは、パウロを混乱の首謀者であると決めつけて拷問しようとした時に、パウロがローマ市民権を持っていることを知ったからです。ローマ市民を正当な理由なく拷問、縛り付けることは不当な扱いでした。彼は自らの失態を隠すために事実を歪曲しているのです。千人隊長の関心はもっぱら、自らの保身にありました。

◆ 千人隊長の無関心

続きを見てまいりましょう。【28-30 節】千人隊長ルシヤは保身のための歪曲はあったにせよ、エルサレムを警備していたローマ軍の責任者として事実を記しています。千人隊長はエルサレム中の大混乱の更なる真相解明のために、ユダヤ教祭司長たちに最高議会サンヘドリンの招集を命じました。ローマ軍によるユダヤ議会開催命令は通常ではありえません。しかしこの時ばかりは、千人隊長ルシヤの保身とユダヤ教指導者たちのパウロへの憎しみが合致するかの様に議会が開催されました。結果、パウロの弁明と知恵によって、大祭司アナニヤの愚かさが露呈され、実際のところユダヤ教はサドカイ派とパリサイ派とで二分されているという事実も浮き彫りにされ、議会は更なる混乱に陥りました。千人隊長のこの報告内容で私たちが目を留めるべきは 29 節です。彼は自らが招集した最高議会サンヘドリンでの大混乱の中で、パウロに対するユダヤ人民衆の告発理由や感情はユダヤ教の問題であり、ローマ法によって罪に当

たる事実は一切なかったことが分かったと総督ペリクスに報告しています。【死刑や投獄に当たる罪はないことが分かりました】最高議会において、パウロはローマ当局が裁くような罪を犯していないことが判明したという事実に加え、あくまでも彼ら【ユダヤ人の律法に関する問題のため】のようであるとの見解を総督に報告しています。

職務上正しい判断にも見えます。しかし、パウロがユダヤ人民衆の前で、そしてユダヤ教議会の前で二度も弁明、イエス様の十字架と復活を証しするところに千人隊長ルシヤは同席していたにもかかわらず、彼にとってパウロの証しはユダヤ教の問題に過ぎなかったのです。アラム語が分からなくとも、もしパウロが何を証しているのか関心があれば、パウロにギリシャ語で教えてほしいと願うことが出来たはずで、彼は、職務を全うしようとしたと言えるかも知れませんが、結局のところパウロに対して、ほんの少しの関心は持ったものの、パウロが語っている、伝えようとしている福音には全く無関心でありました。

◆ 総督の関心と無関心

この手紙と一緒にパウロはエルサレムからカイザリヤに移送されました。【31-33 節】エルサレムから総督ペリクスが駐屯するカイザリヤまで約 100 km 弱の道のりです。予定通り出発した護衛隊とパウロは、ほぼ半分ほどの距離に位置するアンテパトリスに到着します。ここまで移動できれば、パウロを狙うユダヤ教熱心党員たちからの危険も及びません。ここで歩兵 200 人、槍兵 200 人はエルサレムのアントニア要塞兵営に戻ります。アンテパトリスからカイザリヤに向けて騎兵 70 人に護衛されてパウロはカイザリヤに到着しました。騎兵たちはこの手紙を総督に手渡した後に、パウロの身柄を総督の管理下に委ねたのであります。【34-35 節】総督ペリクスは法的には適切に対応したと言えるでしょう。手紙を読んだ上で、パウロがどの州に属しているのかだけ予備尋問しています。タルソ出身のパウロはキリキヤ州に属します。キリキヤ州はシリア総督の管轄下です。当時は出身地の属州か、事件が起こったとされる属州のどちらかで裁判を行います。もしペリクスが面倒であると考えればシリア総督のもとにパウロを移管することもできました。しかしローマ総督ペリクスは【あなたを訴える者が来てから、よく聞くことにしよう】と言って、パウロを官邸内に留置することにしました。総督はこの問題を引き受けることに同意したのです。今、パウロから何か聞き出すのではなく、あくまでも公正な裁判を行おうとしているかのようなようです。しかし後に明らかになりますが、総督ペリクスはパウロを公正に扱うのではなく、私腹を肥やすために利用することをも画策するのです。もともと奴隷民族出身から成り上がった総督の素性は 24 章で明らかになります。

総督ペリクスの関心は私腹を肥やすこと、そして今朝のテキストに映る総督ペリクスの姿は無関心です。これまでの経過が記された手紙を読んだ上で、パウロに対して、そしてパウロが何を主張しているのかに対して全く無関心な姿が記されております。

◆ まとめ・お勧め

イエス様の十字架の下で、多くの人々が無関心であったように、パウロが確信を持って証しするイエス様の十字架と復活に対して、ローマ当局者たちは無関心です。福音に対する無関心は、今に始まったことではありません。ではなぜあの時、十字架で処刑された強盗の一人が、百人隊長が「イエスは主である」と告白できたのでしょうか？ 私たちは一生懸命にその要因を探そうとします。勝手な想像を働かせようとし、理に適う要因を探そうとします。人がイエス様による罪の赦しと救いに心から関心を寄せることが出来るのは、知識でもなく、弁が立つからでもなく、人柄によるのではありません。その答えは使徒の働きに貫かれていることを私たちは知っています。福音を語る者にも、聞く者にも聖霊なる神様が働かれるのです。今も昔も教会の前に立ちほだかるのは人々の無関心です。無関心の中で私たちが出来ることは何でしょうか？ 確信に立ってイエス・キリストの十字架と復活を証しすることです。救い主イエス様によって罪赦され、義と認められるという信仰を確信を持って証しすることです。そしてもし私たちが努力できることが一つあるならば、聖霊なる神様が私たちと共に働いてくださいと祈り続けることではないでしょうか。疑わず、確信を持って祈りたいのです。